

9:29 アビハイルの娘である王妃エステルと、ユダヤ人モルデカイは、プリムについてのこの第二の書簡を確かなものとするために、いっさいの権威をもって書いた。

9:30 この手紙は、平和と誠実のことばをもって、アハシュエロスの王国の百二十七州にいるすべてのユダヤ人に送られ、

9:31 ユダヤ人モルデカイと王妃エステルがユダヤ人に命じたとおり、また、ユダヤ人が自分たちとその子孫のために断食と哀悼に関して定めたとおり、このプリムの両日を定めた時期に守るようにした。

9:32 エステルの命令は、このプリムのことを規定し、それは書物にしるされた。

10:1 後に、アハシュエロス王は、本土と海の島々に苦役を課した。

10:2 彼の権威と勇気によるすべての功績と、王に重んじられたモルデカイの偉大さについての詳細とは、メディヤとペルシヤの王の年代記の書にしるされているではないか。

10:3 それはユダヤ人モルデカイが、アハシュエロス王の次に位し、ユダヤ人の中でも大いなる者であり、彼の多くの同胞たちに敬愛され、自分の民の幸福を求め、自分の全民族に平和を語ったからである。

王妃エステルとモルデカイが記録を残すようにしたとあります。彼らはその権威を持っていたからです。このように自分の地位や権威は、神様から与えられたものなので、神様のために用いるべきです。

その記録の内容は本書を読んでわかるように、エステルやモルデカイを美化したものではありませんでした。モルデカイがハマンを怒らせてしまったことや、エステルが初めは自分の使命が明確でなかつ

たことなど、決して自分をよく見せようという意図がなかったのです。そしてイスラエルを救ったのはプリムであって、そこに働いた見えない神の御手がクリーズアップされています。主のことを語る者はこのように、自分に死んできよい思いで語ることが必要です。

10章は年代記の書に言及されていますから、後代の方が書いたと思われる。それでモルデカイが賞賛されています。それとともにアハシュエロス王も賞賛されているのは、ユダヤ人の解放に役かったということかもしれません。またこの書がペルシヤ社会に存在するための知恵でもあったでしょう。

このようにどんなに迫害の中にあっても、その信仰を守ろうとするなら、主は守ってくださること、またそこには主からの知恵も与えられていることも信じましょう。信仰者がどんなに少数派であっても、どの時代であっても同じです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

